



Eld: Kou MUKAI
2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPAN 0.

15. Maj, '81. No. 247

イオム通信 向井孝

大阪市阿倍野区旭町2-12-2

▼久しぶりに出あった人から、中にわに「本作り」だいいん進行してますか、ときかれて、エッ……あの……と詰る事ごとしきり。

実のところ、まだ半分も原稿が仕上がってない段階で、あとはメモや下書きだけ。

今迄やってきた見当では、びつりり、かかりつきりにしてあと二カ月？しかし、とてもこのじやないが、びつりりやるのなんて夢で、まあ正味、月のうちの1/5精力がさけたらよいが……とすると……

一体、そのどの位かみるか、いやはや、エライこっちや。それでいつも心のスミでそのことを考えて、何となくあせりながら、いつてもせす、気分だけ忙しく、いついつの日その日をすどしてしまっている。次や。(手紙の返信やお礼なども、おくれにおくれてすみません)(5月11日)

ハプニングの意味

5.10女々女々カーニバル

▼「日あるふう子さんか」「おいちやん、明日中之島公会堂へいく？」ときいた。「うん、ちよつと迷ってんねんけど……いく」とこたえたとたん、大いに積極的のみてこようーという気になった。それは、① せっかく行く以上は、眼と心をフルに



② 回轉して、何でもかんでもとん窓に投取してこよう。批評家にならず、ちよつこでもエエところを見つけてこよう。(これはいつもぼくが何かに参加するときの心得なのだが、時々忘れるわけだ。) ③ 女たちだけがあつまつて、企画から

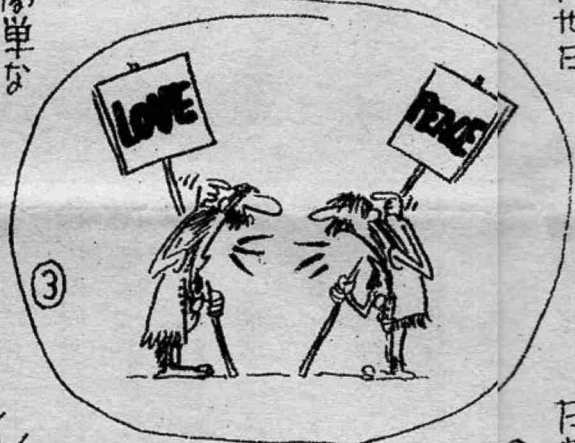
進行その雑務のすべてをやききつて、しかも中の島公会堂全館を借りきつてやる大イベントなんてものは、めつたやにらない。あつてもなかなか参加しにくい。それが、たとえびろろ子さん竹内さん……ぼくの知り合いの彼女たちがたくさん中心メンバーだし、顔見知りも入れたら知んちかい人たちが力を入れてる。それを知らんふりしてゐるなんてできない。という以上に、何よりも気易く、行きやすい。こんなチャンスを、男だという気おくれから、みすみすがすんでどうかしてる。千載一遇の機会ではないか。ーというわけで、以下は当日の簡単な印象、それに触発されたことなどの、メモ的走り書き。



① この催しの特徴は、何よりも、当出入口でわたされたプログラムに表現されていた。すみすみのこまかなところまで気をくばった、手書きのそれは、15のワークショップがそれぞれ別のコマを割当てられて、その限定された空間一ぱいを、ありつたけのおもいをこめて、たがいに競いあつてかざり、語りかけてくる、あたたかたにぎやかな声であふれていた。それは「限定」されていることによつて、より一そうこまやかな配慮が示され、全体として大きくまとまりながら、さまざまに色合いをたがいに引立てあつてた。まさに、むなら



② 上層部としてはつくれぬプログラムだった。② そのワークショップには、何となくはいりにくくて、(甲斐制の部屋をもらった)入口をのぞいた程度だったが、それこそプログラムそのまま、それをつくり出し運営する女たちの心づくしというか心意気が、それぞれのやり方で、伝わってくるものだった。「女同士だから」といううちつけ方が、はじめからあつて、体をやわらかくゆき、詩があつていような、女たちの姿が印象的だった。



③ もつとも、ぼくをふくめた男たちは、いささか、行き場がなくて、所在なげに大ホールの椅子に坐つて、夜のステージをなんとなく待つという風景がみられた。昼のステージは、歌、詩朗読、落語、踊りといったものだったが、夜の部の、一人芝居、歌、漫才、といったものもふくめて、まあ、あたりまえの出来栄で、女の文化を示す、というには、ただ、女が出演したというだけのことでしかないもののように思われた。

④ 夜のステージでは、ルビーフルーツジャンゲルという、二人のシンガーの歌にびつくりした。彼女たちのレズビアン賛歌の、すさまじいばかりの歌声に圧倒された。こんな歌をきくことなんて、これからもうそうありえないだろう。そんな意味では

